

チェチェメ二号とリエン・ポロワット号
～2隻のカヌーから見てくるミクロネシアの航海術と船造り～

海工房代表取締役
門田修

【はじめに】

ミクロネシアは今もカヌー文化が生活と密着して息づいている。海洋文化館は2つのイベントを通じて、ミクロネシアのカヌー文化と接触し、日本にそれを紹介してきた。2つのイベントとは、海洋博開催当時に行われたチェチェメ二号の航海と、海洋文化館がリニューアル時に発注したリエン・ポロワット号の建造である。イベントに関わった記録者として、それらの概要を報告すると共に、イベントが与えた影響と成果、ミクロネシアの海洋文化の現状などについて検討を加える。

I. 1975年チェチェメ二号の航海

10月28日、サタウル島を出航。11月4日サイパン着。24日サイパン発。12月13日海洋博会場着。航海中の食事は、魚、海、島で積んだココヤシやパンノキの実のみ。

II. 2012～2013年リエン・ポロワット号の建造、航海、展示

海洋文化館は、伝統的手法に則った建造技術による航海カヌー製作をポロワット島に依頼。同時に秘技とされる建造工程の映像記録を、島のチーフに承諾して貰う。2012年3月15日船体になるパンノキを伐採。島人20～30人が常時製作に携わる。実働日数約150日で完成。2013年6月13日～18日（途中無人島に1泊）ポロワットからグアムまで約800kmを航海。グアムで一部解体後コンテナ船にて沖縄に運搬。再組立後、展示。

III. 2つのイベントが及ぼした影響と成果の検討

- ・チェチェメ二号の航海はレジェンドとして語り継がれている。「チェチェメ二号のような航海を我々もやってみたい」という話を、他のカロリン諸島の島々でよく聞く。
- ・チェチェメ二号の船体は民博に展示され、40年近くたくさんの観覧者の記憶に残る。
- ・リエン・ポロワット号の建造は島の住民の大多数に関わった一大事業であった。女性たちも、食事作りやパンダナスの帆作りに携わる。日当を支払ったために、島に居て現金が稼げるという利点が歓迎された。
- ・若者たちに建造知識を継承させた。問題は高校進学に伴い島を離れ、Uターンするまでのあいだ、伝統知識や技術の習得機会が途絶えること。
- ・建造工程に関しては、すべて伝統的な手法を要望し、全工程の映像記録を残すことができた。また、建造と航海に関する儀礼も記録できた。

- ・ ポロワットの誇りとして語り継がれる。現在の展示状況などは SNS で関係者に広く知られ、「島のカヌーを大事に扱ってくれて感謝する」などのメールも届く。
- ・ リエン・ポロワット号建造に関わった男たちは、「博物館に納めて終わりではない」と、2016年5月、2隻のカヌーで太平洋芸術祭開催地のグアムへ航海した。この芸術祭へは、ホウク島から1隻、サタワル島から2隻、ラモトレック島から3隻のカヌーも航海した。